

平成二十五年 度

# 中学校入学試験問題 国語

第一回（三月一日実施）

試験開始の合図があるまで問題用紙は開かず、左記の注意事項をよく読んでおきなさい。

- 一、問題は23ページまであります。足りないページや、印刷のよく見えないページがあったときは、手を上げて申し出てください。
- 二、解答用紙は別になっています。答えはすべてそこに記入してください。
- 三、解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。
- 四、問題用紙には、受験番号・氏名を書く必要はありません。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、本文を変えているところがあります。)

夕食の皿をテーブルに並べているとき、つい鼻歌が出た。めずらしいことだった。この家に引っ越してからは初めてだったかもしれない。

「ごきげんじゃない」

揚げ物を皿によそいながら、お母さんがからかうように言った。

フミは照れ笑いを浮かべた。恥ずかしい。歌を聞かれたことも、浮き立った気分を見透かされたことも。

でも、お母さんは「わかるわかる」とうなずいてくれた。フミも、ふだんなら真っ赤になった顔を上げられなくなるところなのに、意外と平気でいられた。恥ずかしさを脇に押しやっってしまうくらいに、とにかく今日はごきげんで、お母さんはちゃんとその理由を知っている。

「ねえフミちゃん、天気予報見た？」

「さつき、テレビでやってた」

「どうだった？ 明日」

「雨だって、やっぱり」

今朝からの雨は、前線が居座っているせいで、このまましばらく降りつづきそうだった。

「残念だね。今夜のうちにパーッと降って、明日はあがるといいのに」

「でも、どうせ家の中で遊ぶから」

「家の中にいたって、外が暗れてるほうが気持ちいいじゃない」

お母さんはそういう性格だ。青く晴れわたった空を見ると、それだけで「生きててよかった」という気になるのだという。

「てるてる坊主つくってみれば？」

一瞬、胸がどきんとした。ふだんは思いだす機会のなかった——でも胸の奥にちゃんと残っていた記憶が、不意によみがえりそうになったのだ。

あわててそれに蓋をしたフミは、「おねえちゃん呼んでくるね」とダイニングを出た。

二階のマキの部屋のドアには、「立入禁止」と書いた小さなプレートが掛っている。小学六年生のマキではなく、四年生のフミの目の高さに、吸盤で取り付けてある。冗談だとわかっていても、ノックをする前にはいつもためらってしまう。お母さんもしょっちゅう「こんなの取っちゃいなさい」と怒っているが、マキは知らん顔したまま、はずそうともしない。

それでも今日のフミは、ドアの前に立つと間を——「かずにノックすることができた。ノックの音も、軽く、はずむように響いた。

「おねえちゃん、晩ごはん」と声をかけると、返事なしでドアが開いて、むすっとした顔のマキが戸口に立った。

「あのさー、フミ。いちいち呼びに来なくていいから。七時になったら晩ごはん、わかってる、あんたに言われなくても、下りるから、そんなの勝手に」

⑤ 順番がばらばらになった言葉が、とがった声になって、フミの体のあちこちにつかつた。

「いめん……」

「べつに怒ってるわけじゃないけど」——という声が、しつかり怒っている。

「ノックのことじゃなくて……明日のこと……」

「怒ってないよ、そっちも」

嘘だ。絶対に、ノックのことよりもっと怒っている。フミはもう一度【】を押し、謝ろうとしたが、マキは「うるさくしないだったら、べつにいいから」と言っ、フミと戸口の隙間に割り込むように部屋を出た。

「あいさつとか、しないでいいでしょ」

階段を下りる前にフミを振り向いて言っ、「向こうがあいさつしてきても、わたし、知らないひとはしゃべりたくないから」と早口につづけ、さっさと階下に向かった。

階段を一段下りるごとにポニーテールが揺れる。本人はたいして自慢には思っていない様子でも、癖毛のフミにとってはあこがれのマキのポニーテールは、きげんが悪いときの方が大きく揺れる。

フミは、マキがダイニングに入ったのを確かめてから歩きだした。最初はうつむいて階段を下りていたが、まあいいや、と顔を上げると、なんとか元気を取り戻すことができた。きょうだいになつて三カ月、マキのブ愛想な態度や言い方にはだいたい慣れた。口で言うほど意地悪じゃないんだ、とも気づいていた。

それに、とにかく、今日のフミはきげんなのだ。明日が楽しみでしかたないのだ。

前の学校の友だちが、明日の日曜日に遊びに来る。フミと仲良し四人組をつくっていた友だちが、全員——ユキちゃんとモモコちゃんとナツちゃんがそろつて、会いに来てくれる。三人とも幼稚園の頃からの付き合いだ。

子どもたちだけで電車に乗って、乗り換えまでするのは、みんな初めてのことにらしい。大冒険をして再会するなんて、アニメやマンガの主人公みたいだ。胸がわくわくする。(中略)

木曜日に確認の電話をかけてきたユキちゃんは「新しい学校のこと、たくさん教えてね」と言っていた。もちろんフミもそのつもりだった。みんなとお別れしたのが八月で、そこから九月、十月、そして十一月の昨日まで。その間のできごとをいろいろ思いだして、あれを話してあげよう、これも教えてあげたらウケるだろうな、と張り切っていた。

ユキちゃんは「新しいお母さんにも会えるでしょ？ ゼーったいに会わせてね」とも言った。そっちもだいじょうぶ。お母さんのほうもみんなと会うのを楽しみにしているし、オヤツにはお得意のシフォンケーキを焼いてくれることになっている。

ユキちゃんはさらに言った。

「あと、新しいおねえさんとも一緒に遊びたいって、みんな言ってるから」  
それが問題だった。

マキが遊んでくれるはずがない。にっこり笑って「いらっしやい」とも言ってくれないだろう。昨日までは、マキは「フミの友だちが帰るまで、どこか遊びに行くから」と言っ、フミもじつはほっとしていた。でも、マキは今日になつて「もし明日も雨だったら、わたし、ウチにいるから」と言っ、だつて自転車にも乗れないのに、わざわざ傘差して、なんでわたしが外に出てなくちゃいけないのよ」と急に怒りだして、そもそもは自分で決めたことなのに「追出す権利なんてないでしょ、あんたには」とまで言っ。

身勝手だ、と思う。でも、友だちを三人も家によぶ自分のほうがもつと身勝手なのかもしれない、という気もする。お父さんが家にいればマキとお母さんをドライブに連れ出すという手もあったが、あいにくお父さんは昨日から来週の月曜日までの予定で出張に出た。いた。

⑨ せめて、ユキちゃんたちがあいさつをしたら笑い返すくらいはしてほしい。

【 A 【】口ではあんなこと言っただけ、それくらいしてくれるよ、と期待する気持ちと、【 B 【】とあきらめる気

持ちが半分ずつ。最初の頃は百パーセントあきらめるしかなかったんだから、だいぶ仲良くなれたんだよ、と思う気持ちと、三カ月たつてもまだ百パーセント期待できないなんて、ちっとも仲良しになってないよ、と思う気持ちも、半分ずつだった。

ベッドに入っても、雨の音が耳についてなかなか寝付<sup>ねつけ</sup>られない。この様子なら、天気予報どおり、明日も一日中雨になるのだろう。てるてる坊主、やっぱりつくつてみようかな――。

ふと思ひ、ベッドの上で体を起こしかけたが、あくびのようなため息をついて、また横になった。てるてる坊主には思い出がある。何年前の何月何日というのではない、亡<sup>な</sup>くなったお母さんの思い出だった。

お母さんはフミが小学二年生の夏に亡くなった。もともと心臓<sup>じんぞう</sup>と腎臓<sup>じんぞう</sup>の具合が悪く、フミがものごころついた頃からずっと入院を繰り返していた。

入院中は、お父さんやおばあちゃんに連れられてお見舞<sup>みまひ</sup>いに通った。お母さんもフミと会うのをいちばんの楽しみにしてくれていた。でも、病室に入ってくるフミを迎<sup>むか</sup>えたときの最初の言葉はいつも、「ありがとう」ではなく「ごめんね」だった。幼い頃はお母さんが謝るのが不思議だったフミも、四年生のいまは、<sup>⑩</sup>そのときのお母さんの気持ち<sup>⑪</sup>がわかる。

お母さんは、フミがお見舞いに来る日やその前日に雨が降ると、てるてる坊主をつくって病室の窓に吊<sup>つる</sup>していた。

雨の中をお見舞いに来るのは大変だから、天気が良くなるように祈<sup>いの</sup>ってくれていたんだ、と昔は思っていた。でも、お母さんが亡くなったあとで、お父さんが教えてくれた。

お母さんは、お見舞いを終えて病院の門まで歩くフミを、病室の窓からいつも見送っていた。顔を見てしまうと悲しくなるから、フミにこつちを振り向かせないよう、お父さんに頼<sup>たの</sup>んでいたのだという。そのときにフミが傘を差していると、後ろ姿が見えなくなつて

しまう。だから、せめてフミが帰るときには雨があがつていてほしい。そんな祈りを込めて、てるてる坊主をつくっていたのだという。

ティッシュペーパーを丸めて輪ゴムで縛<sup>しば</sup>りただけのてるてる坊主は、変わった形をしていたわけではない。顔のところに目や鼻が描<sup>か</sup>いてあったかどうか覚えていない。でも、それは、<sup>⑩</sup>フミにとっては特別なてるてる坊主<sup>⑪</sup>になった。

もつと早く、お母さんの生きているうちに教えてほしかった。フミは泣きながらお父さんを責めた。お父さんも涙<sup>なみだ</sup>ぐんで、ごめん、ごめん、ほんとうにごめん、と謝った。お母さんのつくつたてるてる坊主は、手元には残っていない。もう二度と見ることも触<sup>ふ</sup>れることもできない。もちろん、それを真似<sup>まね</sup>ることは誰<sup>だれ</sup>にも――いまのお母さんにさえ、できない。

今日、いまのお母さんは雨の中を花屋に出かけて、亡くなったお母さんの写真にクリスマスローズを飾<sup>かざ</sup>ってくれた。

「明日来るお友だち、前のお母さんのこともよく知ってるんでしょ？ ウチに来たら、最初に会ってもらってね」

それがうれしいのと、うれしくないのと――境目がギザギザになって、やっぱり半分ずつだった。

〔重松清「ポニーテール」による〕

問1 — 線①「その理由を知っている」とあるが、「フミ」がごきげんな理由を、本文中の言葉を使って二十字以内で説明しなさい。

問2 — 線②「あわててそれに蓋をした」理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ その記憶を思い出すことで悲しい気持ちになることがわかっており、姉の「マキ」のきげんまでそこねてしまいそうだから。
- ロ その記憶が昔の母との悲しい思い出につながるので、せっかくのごきげんな気持ちをだいなしにしたいと思つたから。
- ハ その記憶が胸の奥の「てるてる坊主」の悲しい思い出と重なり、心配している雨が降りそうな気持ちになってくるから。
- ニ その記憶は悲しい思い出なのであまり思い出したくはなく、昔の母を思い出しているのを今の母に気付かれないから。

問3 — 線③「冗談」とは具体的にどんなことを指しているのか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 「マキ」が立入禁止のプレートをお母さんから注意されても知らん顔をしていること。
- ロ 「マキ」が立入禁止のプレートをすぐドアから外せるよう吸盤で取り付けてあること。
- ハ 「マキ」がわざわざ「フミ」の目の高さに立入禁止のプレートを取り付けていること。
- ニ 「マキ」がお母さんや「フミ」に対して部屋のドアのノックさえも禁止していること。

問4 — 線④「間を」「かず」「⑥」「」を押して」に当てはまる漢字一字をそれぞれ考えて答えなさい。

問5 — 線⑤「順番がばらばらになった言葉が、とがった声になって、フミの体のあちこちにつかつた」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 「フミ」のしつこい態度に「マキ」の怒りがわきあがった。
- ロ 「マキ」の思いやりのない言葉が「フミ」の心を傷つけた。
- ハ 思いつきの「マキ」の言葉が「フミ」の感情を揺さぶった。
- ニ ふきげんな「マキ」の態度が「フミ」をふるえ上がらせた。

問6 — 線⑦「ブ愛想」のカタカナの部分と同じ漢字を使うものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 一寸の虫にも五ブのたましい。
- ロ あの国はブ器を輸出している。
- ハ 漢字のブ首を調べてください。
- ニ 父のブ事を聞いてほっとした。

問7 — 線⑧「自分で決めたこと」とはどのようなことか。最も適当なものを次の中から二つ選んで記号で答えなさい。

- イ 「マキ」が「フミ」の友だちが帰るまで遊びに行くが、雨だったら家にいること。
- ロ 「マキ」が「フミ」の友だちが来ることにより、家から追い出されてしまうこと。
- ハ 「マキ」が「フミ」の友だちが来ても、知らない人だからあいさつをしないこと。
- ニ 「マキ」が雨が降って自転車に乗れないのに、わざわざ傘を差して外に出ること。

問8 — 線⑨「せめて」を正しく使っている文を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 私がこの商品の欠点をあげるなら、せめて値段が高いことです。
- ロ あなたがたがせめてあやまってくれれば、ゆるしてあげたのに。
- ハ 責任者の方が自分をせめてくれるならば、ましだったのになあ。
- ニ お客さまがこれらの文具を買うなら、せめて二千元になります。

問9 【 A 】【 B 】に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

- イ ありがたいなほんとに      ロ がっかりだな      ハ だいじょうぶだよ
- ニ むりだよそんな      ホ もうしわけがないな

問10 — 線⑩「そのときのお母さんの気持ち」の具体的な説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ てるてる坊主を作っても雨が降ってしまうのを、すまなく思う気持ち。
- ロ 雨が降るとお見舞いに来るのが大変なので、かわいそうに思う気持ち。
- ハ 幼い「フミ」のそばにいてやることができず、申し訳なく思う気持ち。
- ニ 遠くの病院に「フミ」が通って来ていることを、くやししく思う気持ち。

問11 — 線⑪「フミにとっては特別なてるてる坊主になった」理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ てるてる坊主には母の自分に対する思いが込められていることを知ったから。
- ロ 母のつくったそのてるてる坊主は父に捨てられてもう手元には残っていないから。
- ハ そのてるてる坊主は自分のために作ったものだと思いが亡くなった後に気づいたから。
- ニ 母がティッシュペーパーを丸めて作ったそのてるてる坊主は一つしかなかったから。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(＊のついた説明は出題者が加えたものです。)

人類の社会で、宗教に通じる<sup>(1)</sup>ゲンシヨウが見られるようになったのは、私たち現生人類(ホモ・サピエンス)ではなく、その親戚ともいえるネアンデルタール人の時代にまでさかのぼることができません。

彼らが暮らしていた遺跡は、西アジアからヨーロッパ最西端にいたる広範囲の地域で見つかっています。そしてこうしたところでは、<sup>①</sup>葬られたと見られる遺体がいくつも見つかっているのです。そこでは、体を伸ばして寝ているように葬られた「伸葬」と、体をかがめた姿勢で葬られている「屈葬」という、二種類の埋葬の仕方が見られます。

伸葬の例としては、男女の大人二名、子ども四名の合計六名の遺体が、「A」の方向に並んで葬られていたケースが報告されています。一方、屈葬の例としては、一七歳前後と思われる青年の遺体が見つかっています。その青年の遺体は、ひざを額にくっつけ、手て顔をおおいながら、右脇を下にした姿勢で横向きにされていました。

どちらの場合も、周囲に石器や動物の骨などがあり、これらは遺体の副葬品だったのではないかと見られています。

ここで注目されるのは、ネアンデルタール人たちが、仲間などの死に際して、遺体をそのままにできなかったことです。六名の遺体が並べられていた方が、日の出と日没との関連から「A」に決まったのかどうかはわかりません。また、屈葬という埋葬法がおこなわれた理由が、生まれる前の胎児をイメージしたからなのか、あるいはこの青年の崇りのようなものを怖れたからなのか、などについてもはっきりしたことはいえません。

しかし彼らが、人間は死ねばすべて終わりになるとは考えず、死んだ後も何らかの働きをしつづける、と考えていたことは間違いないでしょう。

また、六万年ほど前のネアンデルタール人の遺跡では、遺骨のあったところの土の中から、八種類の花粉が高密度で発見されています。彼らが「B」

「可能性が高い」と考えられています。死者を悼む彼らの思いが伝わってきそうです。これらのゲンシヨウは、人類の宗教の黎明期(＊はじまりの時期)ともいえる時期に、彼らが抱いた素朴かつ根源的な思いを表現する<sup>(2)</sup>ゲンシ的な宗教行為だった、といってもよいように思えます。

ネアンデルタール人が繁栄を謳歌していた(＊楽しんでいた)時期、私たちに直接つながる現生人類、ホモ・サピエンスがしだいに勢力を伸ばし始めます。

もちろん彼らも、宗教行為に類することをおこなっていました。

一万〜四万年ほど前のヨーロッパで生きていた、「クロマニヨン人」と呼ばれるホモ・サピエンスの墓地遺跡からは、赤く色を塗った遺骨や赤い土などが出てくるときがあります。

イ これらの頭蓋骨が、敬愛する先祖のものなのか、強かった敵のものなのか、それとも神への犠牲なのか、その詳細はわかりません。

ロ ただ、遺体から頭部を切り取り、それらを円状に並べたという行為には、なんらかの宗教的な意味合いがあったはずで

ハ さらに彼らの遺跡からは、円形に並べた小石の上に置かれた複数の頭蓋骨も見つかっています。

ニ これは、死者の埋葬時に、遺体の上に赤粘土をかけたためではないかと考えられています。

またクロマニヨン人たちは、女性をかたどった石灰石の彫像をいくつも残しています。たとえば、オーストリアで見つかった「ヴィレンドルフのヴィーナス」と呼ばれる一〇センチほどの彫像は、目鼻や手足などが省略されている一方で、胸やお腹、お尻などがとても誇張されていて、妊婦を表現していたのではないかと考えられています。

こうした母親像は、ほかにもたくさん見つかっています。

彼らが母親像を彫った目的もはっきりしていませんが、彼らが生命の誕生という神秘に心を打たれ、そこに自分たちの家族や仲間の繁栄を願う気持ち<sup>②</sup>をかけたのかもしれないと推測されます。

クロマニヨン人はまた、動物などを題材とした壁画も描いています。

南フランスから北スペインにかけての地域で、七〇ほどの洞窟の遺跡から、一万〜二万八〇〇〇年ほど前に描かれたと見られる壁画が見つかっています。その代表が、有名な「ラスコーの壁画」や「アルタミラの壁画」です。

これらの壁画は、クロマニヨン人がすみかとしていた洞窟の壁に描かれました。

しかしその場所は、入り口近くの明るい場所ではなく、洞窟の奥深く、穴をくぐり、狭い道を通り抜けていった先、ということがほとんどです。彼らは、通るのもやつとという狭く真つ暗な道を、わずかな明かりだけを頼りに進み、その奥で壁画を描いたのです。

そのためこれらの壁画は、単にだれかの創作欲によって描かれた鑑賞用の絵ではない、と見られています。<sup>③</sup> 宗教的あるいは呪術的な意味があつたのではないかと、研究者たちは考えているのです。

初期の宗教は、人類が、死や自然の驚異などと出会う中で少しずつ芽生えていきました。

そのカテゴリー<sup>③</sup>については、宗教民族学という分野から、いくつかの学説が出されています。

その一つめは、「アニミズム説」です。この説では、人間と死との出会いが大きな役割をはたしていたといえます。たとえば、つい

先ほどまで元気になっていた仲間が、事故に遭って死んでしまうようなことは、彼らもしばしば経験していたはずですが。このとき、元気だった仲間と、動かなくなった遺体とはなにが違うのか、彼らは疑問に思ったでしょう。そこから導き出されたのが、「生命の原理」であり、「魂」「精霊」という概念<sup>④</sup>だったということです。

そして彼らはしだいに、この魂・精霊は、人間だけではなく、動植物にも、あるいは生命のないものにも宿っている、と考えるようになります。そこから「精霊崇拜」がおこなわれるようになり、やがて宗教が誕生したとするのが、このアニミズム説<sup>④</sup>なのです。

〔真淳平「人類の歴史を変えた8つのできごと」I〕による〕

問1 ——線①「葬られたと見られる遺体がいくつも見つかっているのです」と言えるのはなぜか。その理由が書かれている一文を探し、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問2 文章中に二か所ある【A】に共通して当てはまる漢字二字の言葉を、考えて答えなさい。

問3 文章中の【B】に当てはまる、死者のためにとつた具体的な行動を、二十字以内で考えて答えなさい。

問4 文章中の……線に囲まれたイ、ロの各文を意味が通るように並べかえて、その順序を記号で答えなさい。

問5 — 線②「かけた」と同じ使い方のものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 家族に不自由をかけた。
- ロ 彼の案を会議にかけた。
- ハ 新製品に期待をかけた。
- ニ 父は知識を鼻にかけた。

問6 — 線③「宗教的あるいは呪術的な意味があったのではないか、と研究者たちは考えている」のはなぜか。その理由を説明した

次の文の【 】に当てはまるように三十五字以内で考えて答えなさい。

・ クロマニヨン人の壁画が、【

】から。

問7 — 線④「アニミズム説」の説明として適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 魂や精霊は生きている人間のみに宿るものであり、遺体には存在しないと考えること。
- ロ 自然界のすべてのものは、それぞれ固有の霊魂や精霊などを持っていると考えること。
- ハ 世の中の生きているものにとって最も重要なものは、霊魂の存在であると考えること。
- ニ 万物の生死を分けるものは、そのものに霊魂が存在するかどうかであると考えること。

問8 次の中から本文の内容に合っているものを、二つ選んで記号で答えなさい。

- イ 人類は死や自然の驚異と出会うなかで、宗教的な考えを持つようになった。
- ロ 初めて宗教的な儀式が見られるようになったのは、現生人類の時代である。
- ハ 死んだ人を屈葬にしたのは、死者の崇りのようなものを怖れたからである。
- ニ 壁画を描いたり像を彫ったりしたのは、人間が繁栄を謳歌した証拠である。
- ホ 人間を含むすべてのものに生命が宿るとする考え方が、宗教に通じている。

問9 — 線①「ゲンショウ」、②「ゲンシ(的)」、③「カテイ」のカタカナの部分それぞれ漢字に直しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(＊のついた説明は出題者が加えたものです。)

寒い日は、できるだけ家の中にいてちまちま過ごしたい。しかし、子供は遊ばなければすぐに退屈する。かつての屋内の遊びといえはカルタやトランプ、囲碁将棋だっただろうか。男のきょうだいがいなかったで男子の事情はよくわからないが、女の子は人形遊びや小さな道具を使った遊びを静かにしていたものだった。

室内の遊びといえば、「綾取」。紐を結んで輪にしたものを両手であれこれ操り、橋だの箒だのをつくるあれである。一人でやったり、二人でやったり、それなりに楽しめるのだが、割合にすぐ飽きてしまうのは残念だった。

### I あやとりの崩れて果てしひとり取り

鈴木栄子

この「綾取」、大きな「A」でないと載っていないが、実は季語になっている。外で遊ぶ気持になれない時の遊びとされたからだろうか、冬に分類されている。俳句を始めるまでは特に季節を意識していなかったが、「冬ですよ」と教えられると、冬季以外に綾取をしてはいけない気分になるのは面白い。

もちろん、屋内での遊びだけが推奨されていたわけではない。健康増進が叫ばれる近年は、大人も外で体を鍛えることを勧められているが、かつての子供は何がなんでも外で遊ぶべきだといわれていた。しかし、夏場と違って、水を使って一日中遊んでいられるはずもない。とにかく寒いからだから。そこで、何でもいから外で動くことが冬の遊びの基本となった。たとえば次の句を見て欲しい。

### II 縄とびの子が戸隠山へひるがへる

黒田杏子

この句の季語は「縄とび」(縄飛)である。たしかに、びゅんびゅん縄飛をしていると体は温まる。しかし、たとえば「鬼ごっこ」も基本的には走り回っているわけだから、冬の季語になってもよかつたはずだ。しかし、鬼ごっこは季語にならず、縄飛は季語になった。誰かがそれなりの句をつくれれば、それまで季語ではなかった言葉が季語に昇格する、そのはつきりとした例かもしれない。

雪の降る地方では、「雪投げ」という遊びがある。いわゆる「B」である。

### III 靴紐をむすぶ間も来る雪つぶて

中村汀女

ただ、これはどちらかというと、雪国というよりさほど雪の降らない地域で盛んに行われていると見たほうがよい。なぜか？ たつぷり雪の降る地方では、最初だけ「B」を楽しんでも、すぐに飽きてしまうから。毎日雪が降り、どんどん積もってゆけば、子供でも雪を疎み(いやがり)始めてしまうのはおわかり頂けると思う。「雪見」という「C」催しが、雪国ではあまり行われないうのと同一理由による。

ただ、寒冷地では、スケートやスキーといった、その土地ならではの楽しみがある。北海道を例にすると、雪の量によってスケート地域・スキー地域に分かれていた。場合によっては両方という地域もあった。私の育った町は日本海側にあり、とにかく雪が多かったので、もちろんスキーだった。冬季の体育の授業は全てスキー一色——ちなみに、まともにスケート靴を履いたのは、東京に来てからである。

スキーは娯楽のない時代の数少ない楽しみだった。しかし、そのスキーを嫌になる出来事が高校時代にあった。通っていた高校のある町で冬季の国体が開催されることになり、われわれ高校生まで駆り出されたのである。

遠距離通学だった私も、スキー一式を必死で担いで行った。現地に着いたら、延々雪踏みである。一日中、国体のための雪踏みさせられ、昼食として支給されたのは凍ったおにぎりと沢庵二切れだった。しかも、雪の中で立ったままの凍った昼食だった。以来、私はスキーが大嫌いになった。

なぜ、こんなことにこだわるか。北国では、「寒さの中で出会うあたたかさ」をことのほか大切にしているからである。どんなスキー場でも、ロッジの中は温かく、食事も温かい。しかし、国体の手伝いはそうではなかった。今の高校生がああいった手伝いをしてとは思えないが、もしもどこかで時代錯誤の試みが行われているのなら、即刻やめて頂きたい。

さて、屋外の懐かしい遊びの一つに「竹馬」がある。この竹馬、俳句を始めるまでは季語だとは思っていなかった。まして、冬などとは、全然。

#### IV 竹馬やいろはにほへとちりぐくに 久保田万太郎

竹馬の例句のうち、最も有名な作品。「竹馬の【D】」という言葉がある通り、幼い頃を共に過ごした友人のことは永遠に忘れない。しかし、皆。いつかまた、出会うことがあるのだろうかという思いを込めた作品である。

竹馬は雪のない地方の遊びかと思っていたが、雪深く娯楽が少なかった地方で活用されていたという。なるほど、この高さなら、深い雪の中を悠々と歩くのに適している。

この竹馬をこのたび買ってしてみた。届いたものは梱包材にすっかり覆われ、予想外の長さを持っていた（最初、「あら、スキーを注文したかしら」と思ったぐらいで）。マンションの廊下でこっそり練習してみる。しかし、コンクリートの堅さにふらつく。「やはり、土か雪の上がいいか」とボヤきつつ、練習を続けている。

「権未知子」季語、いただきます」による」

問1 【A】に当てはまる季語の辞典の名前を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 「広辞苑」      ロ 「歳時記」      ハ 「四季報」      ニ 「万葉集」

問2 ——線①「外で遊ぶ気持ちになれない」とほぼ同じ気持ちを表している表現を、文章中から十五字でぬき出し、初めの三字を答えなさい。

問3 — 線②「冬季以外に綾取をしてはいけない気分になるのは面白い」理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 外で遊べない寒い季節は、家の中で綾取をして遊ぶほうがうれしいから。
- ロ 綾取のような遊びの言葉が、俳句の季語になっているのが興味深いから。
- ハ 子供の綾取遊びまでも、それぞれ季節ごとに分類することが楽しいから。
- ニ 綾取が季語になることで、読む人の気持ちが変わることが意外だから。

問4 — 線③「冬の季語になってもよかつたはずだ」という理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 「鬼ごっこ」も体を温める点では冬の季語として「縄飛」と同じだから。
- ロ 「鬼ごっこ」のほうが有名な遊びで「縄飛」よりも冬に適しているから。
- ハ 「鬼ごっこ」は走り回る遊びであり冬の季語以外には考えられないから。
- ニ 「鬼ごっこ」は冬にしかできない遊びで冬の季語になるのが当然だから。

問5 文章中に二か所ある【B】に共通して当てはまる漢字三字の言葉を、考えて答えなさい。

- イ 安易な      ロ 豪華な      ハ 淡泊な      ニ 風流な

問6 【C】に当てはまる語として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

問7 — 線④「同じ理由」とは具体的にどんな理由か。文章中の言葉を使って二十字以上二十五字以内で説明しなさい。

問8 — 線⑤「そうではなかった」とはどのような状態を指しているか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 娯楽が少ない時代であったのに雪踏みまでさせられた。
- ロ 温かい食事ではなく外で凍った昼食を食べさせられた。
- ハ 大変な重労働をしたが昼食におにぎりしか出なかった。
- ニ スキーを担いだまま雪の中で立っておにぎりを食べた。

問9 — 線⑥「まして」のここでの意味と同じものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ いささか      ロ そもそも      ハ たとえば      ニ なおさら

問10 ー線⑦「竹馬の【D】」に当てはまる漢字一字を、考えて答えなさい。

問11 に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 遊ばなくなってしまった
- ロ ばらばらになってしまった
- ハ 思い出せなくなってしまった
- ニ よそよそしくなってしまった

問12 I・IIの俳句の世界を一つの言葉で表した場合、最も適当なものを次の中からそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

- I イ あやうさ
- ロ おさなご
- ハ けだるさ
- ニ せつなさ
- II イ 現実感
- ロ 疲労感
- ハ 満足感
- ニ 躍動感

問13 III・IVの俳句に使われている技法を、次の中からそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 擬人法
- ロ 擬声語
- ハ 切れ字
- ニ 字余り
- ホ 体言止め

